
リメイク版 天上学園へようこそ！

春野キリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リメイク版 天上学園へようこそ！

【Nコード】

N6291X

【作者名】

春野キリ

【あらすじ】

天上学園。そこは、いろんな奴らがウジャウジャと集まり、規則などを勝手に作ってしまう学校。

そんな学園に、1人の教師が誕生。

そして、いろんな奴らを自分の周囲に引きずり込んでいく！

別サイトに乗せた『天上学園へようこそ！』のリメイク版。

メンバー大量追加中！？

1話 飛び級して、4年生

雲一つなく、月がはっきりと見えている夜の事。

「もうすぐ、か……」

とある家の屋根に、一人の少年が月を眺めていた。

「明日から――」

手に持っている封筒をかざしながら、少年はフツと笑っていた。

〃
〃
〃

春満開の4月。

ある学園で、在校生のための始業式が行われる日であった。

てんじょうがくえん
天上学園。

そこは他の学校とは一筋も二筋も違う、独自の校則がある私立学校である。

学年が6学年までであるが、5年生と6年生は4年生と同じクラスに所属する事になっている。

「ちゃんと上がっているかな？」

「大丈夫よ。あれだけ頑張ったじゃない」

黒気瞳と河村隆は2人並んで、天上学園の通学路を歩いていた。

「でも自信ないなあ……」

「私がついているから……ね？」

「瞳ちゃん／＼」

「隆……／＼」

ちなみにこの2人、1年の時から付き合っているカップルである。

「……道の真ん中でイチャつかないで欲しいんだけど」

と、村伊理歌が前を歩いている2人に呆れながら告げてきた。

「あ、理歌ちゃん。おはようっ」

「おはよう、理歌」

「おはよう」

瞳と河村、そして理歌の3人は同級生であり、瞳と理歌は同じクラスメートでもあった。

「今日から4年生ね」

歩きながら、理歌が瞳と河村に話していた。

「理歌達も受ければよかったのに」

瞳が言くと、理歌は顔を引き付けて返事を返した。

「受けたいのは山々だけど……家の都合で受けられなかったし。何より、私個人で嫌なのよ」

「人それぞれだね、そこは」

と、河村が言った。

「まっ。3年は束ねておくから、安心しなさい」

薄く笑みを浮かべる理歌の言葉に、それはそれで心配なんだけど
つと河村は告げた。

「奈津や理菜たちを頼むわよ」

瞳はそう言って、フツと笑った。

（ （ （

「春休み、どこかに行った？」

「クリスの家に行ったぜー」

丹村敦司にむらあつしは、自分以外の3人と一緒に天上学園の門を潜り出していた。

一人は恋人のクリス・フェイアード、1年の時に留学してきた。

不二周助ふじしゅうすけは、入学する前からの仲間。

手塚国光てづかくにみつとは入学した時の友人で、不二の恋人である。

「また呼ばれたのか」

「ソーダよ！」

手塚の質問に、クリスは元気に答えた。

「それはそうだよね。恋人が陽気過ぎているから」

「どういう意味だよ」

と、敦司が不二に問いただそうとした時。

「あ、サダハルー！」

クリスが、クラス表が張られている掲示板の近くにいた男子生徒を見つけ名前を呼んだ。

彼は乾貞治いぬいさだはるといい、手塚と不二が1・2年の時に同じクラスメー

トであり、部活も一緒であった。

「よっ、乾。おはよーさん」

乾に近づく、敦司はあいさつをした。

「おはよう。4人一緒に来たのか？」

「門前でな」

「そうか。すでにクラス表が張られてあるから、見た方がいいぞ」
と言われ、敦司・手塚・不二の3人は掲示板に張られてあるクラス表に目を向けた。

ちなみに背の低いクリスは見えないため、乾に担がれている。

「おっ、ちゃんと飛び級しているぜ」

「4人ともA組だね」

「そのようだな」

「サダハルはー？」

「B組だ。大石と菊丸、金田や柳沢、それに左・志葉・大野・北条とかもな」

上から敦司、不二、手塚、クリス、乾の順番で話している。

「なんだ、修とのぞみとは別クラスか」
かねだしゅう やなぎざわ

金田修と柳沢のぞみは、敦司の幼馴染で2年間同じクラスでもあったのだ。

「あ、でも。境太君と昌浩君とは同じクラスだよ」

「河村と黒気もだな」

「まじかつ……ん？」

ふと、敦司はある名前に目をむけ、ジッと眺めだした。
「どうした」

と、手塚が尋ねてきた。

「いや。部活の先輩の名前と、懐かしい名前を見つけてな」
「サッカー部のか」

敦司はサッカー部、手塚・不二・乾はテニス部に所属している。
「A組とB組にな。でもまあ、同じ学年になっちゃったし」

「懐かしい名前の方は？」

「不二と会う前に一緒に遊んでた奴。外部者なのに同じクラスとはな」

と言って、敦司はニヤニヤと笑っていた。

〃
〃
〃

天上学園には、『飛び級試験』という制度がある。

もっと知識を上げる、早く卒業したいなどの生徒のために設置されたもの。

普通は1年上がるのが、合格すると2学年3学年へと進級するのだ。

なお参加は自由で、最終判定は理事長が行う。

〃
〃
〃

敦司達がクラスの確認をしている頃。

金田修と柳沢のぞみは、同じ4年B組になった大石秀一郎おおいししゅういちろうと菊丸きくま英二るえいじと4学年の階へと来ていた。

「大丈夫かよっ」

「ミイラみたい〜♪」

「笑うな……!」

途中、保健室に勤務している藤本祐一ふじもとゆういちに捕まった元クラスメートである上田境太うえただきやうたを助け、一緒に同行させている。

「でも良かったにゃ。境太が気を吸われずにすんで! 全部吸われてたら、藤本先生の人形にされていたにゃあ」

「……やな事言うなっ……」

菊丸は励ましているのだが、余計顔色を悪くさせてしまっている。

「ま、まあ。エージの言っている事は正しいからっ」

「どこがだ!? 他にマシな言い方はないのかよ!」

大石がフォローするも、機嫌を悪くさせ境太に怒られてしまった。

「いいじゃん、助けてあげたんだから♪」

とのぞみが笑って言うのと、修の足が突然止まった。

「おい、境太」

「なんだっ」

「着いたぞ」

と言われ、境太は飾られてあるプレートを見上げる。

どうやら、自分のクラスである4年A組の前に着いていたようであつた。

「座席表が張ってあるな」

扉に張られてある紙を見つけ、5人はそれを眺めた。

「あった。窓際から3列目の一番後ろだ。てか、窓際の席多いなっ」と、境太は呆れて言った。

「近くなの、昌浩君だね」

「A組は人数が少ないな」

「いつもだろっ」

と言うと、そうだなっとなつて修が告げる。

「じゃあ、後でな」

「ああ」

「3人をよろしく、境太くん」

“3人を”なわけかよ、大石っ

大石の言葉に、境太は肩を落としてしまった。

「頑張っ生きてきろにゃあーッ！」

「縁起でもねえ事言っなっ!!」

と、境太は菊丸に怒鳴りつける。

「また後でねー」

そう言うのと、境太と別れ4人は隣の教室へと歩いていった。

〃
〃
〃

修たちを見送った境太は、ため息をついて教室へと入った。周りを見渡すと、目と合った少年の方に歩み寄っていく。

「よお、昌浩」

「おはよう、境太！」

1年の時から同じクラスメートである、あへまやいろう安倍昌浩。

「よっ、境太」

昌浩の傍にいるうさぎのような物の怪、あだ名はもっくん。

「もっくんも元気そうだな」

「もっけん言うな！」

物の怪の怒鳴り声を聞きながら、境太は鞆を自分の席に置いた。そして、机の周辺をくまなくチェックし、ホッと息をつく。

「俺も一応調べたけど、まだ何もされてなかったよ」

「そうか。ありがとなっ」

「お前も大変だよな」。あの保険医にめえ付けられて」

「ああ、まったく。いつあの野郎が仕掛けてくるか、わかったもんじゃねえ！」

肩を震わせている境太に、昌浩は顔を引き付けて笑っていた。

「見ない内にすっかり変わったものだな、境太コーチ」

とそこに、1人の青年が二人と一匹の所へとやってきた。

青年の顔を見ると、境太は一瞬驚くがニヤッと笑みを浮かべる。

「久しぶりだな」

「ああ。こんな形でのも再会も悪くない」

「ん？ お前等知り合いか？？」

昌浩の頭に乗った物の怪が、境太と青年の顔を交互に見ながら尋ねてきた。

「こいつは折原義成。おりはらよしなりここに入学する前に、一緒につるんでいた仲間だ」

「人間以外は歓迎する」

「お前……まだ、人間嫌いが治ってないんだなっ」

「「人間嫌い？」」

「治す必要はない。人間はバカな事しか出来ない。見下して何が悪

い」

ああそういう事かと、昌浩と物の怪は義成の言葉で納得した。

「じゃあ、俺らはどうなんだよっ」

「お前たちは特別だ。昌浩もな」

突然名前を呼ばれ、昌浩はえっと驚いてしまった。

「隊長達と一緒にいたのだろう？　一緒にいたのなら、お前も特別だ」

「なんで名前を？」

「天上学園に入る前に調べた」

すげえなーっと、物の怪は義成の事を尊敬した。

「俺以外に会ったか？」

「隊長だけだ。他はまだ会ってない」

「見かけない顔だな」

「彼らも飛び級試験に合格したのかな？」

教室の窓際の方で境太達4人（3人と一匹？）を、普通に進級した生徒が眺めながら話をしていた。

だが、境太達は見られている事に気づいているのだが、気にもしていない。

「やっぱり……上田さんだ」

進級組に紛れ込んでいる1人の飛び級生、りゅうべゐあまる竜堂余が境太の姿を見て告げた。

「知ってる人か？」

「試験の時に前の席に座っていたんだよ」

「へー。じゃあ、2年生だったんだね」

「何組だったのか、覚えていますか？」

と聞かれると、余は首を横に振った。

「ううん。会ったのが試験の時だけだったから」

〃
〃
〃

少しして。

途中で生徒玄関口で会った瞳と河村と一緒に、敦司達6人が4年A組の教室に入ってきた。

「あ！ キョータンと昌浩とモツキュン、ハツケン！」

クリスが境太達を見つけると、笑いながら駆け寄っていった。

「その名で呼ぶなど言ってるだろ！？」

と、物の怪は昌浩の後ろに隠れながら、クリスを睨みつけて怒鳴った。

「あら。もしかして、義成じゃない？」

「おっ、確かに」

瞳と敦司は、境太の隣にいる義成に目を向けていた。

「久しぶりだな。瞳番長、敦司道化」

「久しぶりに聞くやゝ、その呼び名」

「変わってないわね」

久々に聞く名前に、瞳と敦司は少し嬉しそうに笑っていた。

「境太君、少しやつれてない？ 顔色悪いよ」

と不二が言うと、境太はピクツと肩を震わせる。

「また捕まったのか？」

「あの人って、人間じゃないよね」

境太の様子を見た敦司と不二は、ニヤリと笑いあって話していた。

「言うなら、吸血鬼だよな。生気吸うからや」

「吸血鬼は血を吸うんだよ」

「じゃあ、ドラキュラだな」

危険を察知したのか、瞳・昌浩・もっくん（昌浩の肩に乗って）・義成・手塚（クリスを抱えて）・河村は話している二人と体を震わせている生徒から即座に離れた。

――ブチッ。

「それも同じだろうがあああ――っ!!」

堪忍袋の緒が切れた境太が叫びを上げ、どこからか釘付のバットを取り出す。

「オレはやつれてもないし、顔色も悪くない！」

「やつれているではないか、上田」

「触れない方がいいわよ、手塚。また酷い目にあったのよ」

横から声をかける手塚に、瞳は目を細めて境太を見つめていた。

「でも捕まったんでしょ？」

「そのまま持って帰られてしまえよー」

「ざけんじゃねえぞ、てめーら!!!!」

「「逃げろ」」

敦司と不二がそろって教室から出て行くと、境太はバットを持ち

ながら後を追いかけていった。

「またやってるよっ」

3人が出て行った後、河村は呆れて肩を落としていた。

「それが運命^{さだめ}よ、隆」

拝みだす瞳に、「運命^{さだめ}なのか」と手塚がクリスを降ろして尋ねていた。

「コーチも変わったものだな」

「ねー、ネー」

義成のブレザーの端を、クリスは引っ張っていた。

「なんだ」

「敦司をシッテルの？」

何を言い出してくるのかと思い、義成は瞳に説明を求めようと目を向ける。

「クリスは、敦司の恋人よ」

「道化もついに、変態になったのか」

「どういう風に見られていたんだろう、敦司はっ」

「知らん」

昌浩が顔を引き付けていると、物の怪は首を軽く振っていた。

「敦司道化とは、仲間だ」

「仲間！ ヨッピーも仲間！」

「よっぴー……」

いきなりあだ名を付けられ、義成は眉間に皺を作り出す。

そんな彼の様子を気にせず、クリスはまたブレザーの端を引く張る

「今度はなんだ」

「ソレ、何！」

と、義成の周りを指しながら言った。

クリスの目には、小さな生き物達が義成の周りに浮き泳いでいるのだ。

それらは、瞳や手塚達にも見えていた。

「こいつらは精霊だ。力を貸してもらっている」

「へえー。初めて見るな」

と言って、物の怪は精霊に「よっ」と前足を上げた。

「セイレイ……！」

目を輝かせて精霊たちを見つめているクリスに、げっと物の怪が声を上げた。

「触らせテー！」

「お前等逃げろ！ 潰されるぞ……！」

クリスと物の怪の言葉が同時であったが、精霊たちは物の怪に従い飛び散っていく。

「あ、マテー！」

そう言って、クリスは飛んでいく精霊達を追いかけて行った。

呆然としてしまった義成は、ぐったりとしている物の怪に目を向ける。

「お前は潰れていたのか」

「ああ。クリスといい、あいつといい、いい迷惑だよ」

「そうか……精霊が俺以外の言う事を聞いたのはお前で3人、いや1体目だな」

そういう風に言うんだと、昌浩は苦笑いしながら思った。

と、その時。

「で。あそこにいる人達は、クラスメートでいいのかしら？」

窓際にいる生徒を親指で指しながら、瞳は尋ねた。

「ひ、瞳ちゃん。その態度は良くないよっ」

と、河村が驚きながら告げるが。

「見ないうちに過激を増したな、番長」

「そうじゃないと思うんだけど!？」

瞳の行動に感心した義成に、昌浩はツッコミを入れた。

「あそこにいるのは、進級組。そのうち2人は隣のクラス、1人は飛び級生だ」

と義成が説明すると、河村は進級組の中にいる飛び級生、余の姿を視界に入れた。

「あれ、余君？」

「知っているのか、河村」

手塚が聞いてくると、少し顔を歪ませて河村は言った。

「体育の時に会ったんだよ。彼、桃城と海棠と同じクラスだったから」

「確かF組だったか……だが、俺は会った事がないぞ？」

「不二と一緒にサボっていたからだろう」

「なるほど、私達と同じだったわけね」

と瞳が会話に入り、聞いていた昌浩は苦笑していた。

「いや、瞳ちゃんのクラスは全員だからね！」

すかさず河村がツッコミを入れるが。

「……私はサボってないわよ……」

シクシクと、瞳は泣きまねをしだした。

ソレを見て、物の怪は「演技うめえなあ」と感心していた。

「嘘泣きはやめなよっ」

と、河村は反論したが。

「恋人を泣かせるとは……最低だな、河村」

演技だと分かっているながらも、目を細めて手塚が告げてきた。

「話し聞いてた!？」

「ハハッ、ハハハハ」

河村はツツコミをいれ、見ていた昌浩は笑うしか出来なかった。

「悪いな。あいつら、いつもあんな風だからよ」

義成の肩に飛び乗って、物の怪が余に告げてきた。

「お前、F組にいたんだって？」

「うん。僕は竜堂余」

「そーか、そーか。余っていんだな。変わった名前だな」

「だが、面白い。名前以外にもな」

と義成が言った時。

「モツキュン♪」

精霊を追いかけていたクリスが、目標を物の怪に変え、義成の背中に抱きついてきた。

「ギャアアアア！」

物の怪は叫ぶと義成の肩を蹴り、回転しながら、昌浩の腕に飛び込んだ。

「うわっ」

「こえーぞ、昌浩！ あいつ、マジで怖い！！」

「……肩に勝手に乗ったと思いきや、蹴るとはな」

義成は物の怪を睨みつけると、視線を余に戻す。

「俺は折原義成。苗字で呼ぶな、好きじゃないからな」

「ボク、クリス・フェイアード！ クリスって呼んで♪」

義成に抱きついたまま、クリスは瞳・昌浩・手塚・河村・物の怪の方を向いて。

「あっちにいるのは、ヒーちゃんと昌浩とクニーとタカとモツキュン！」

「ちゃんとした紹介しようよ、クリス君！」

「だからその名はやめろ！」

クリスの言葉に、河村と物の怪が叫ぶ。

物の怪の怒りを鎮めるために頭を撫でている昌浩が、先に挨拶をしだす。

「俺は安部昌浩。こっちは物の怪のもっくん」

「もっくんって言うな!」

と、物の怪は昌浩を叱る。

「俺は知ってるだろうけど。河村隆、よろしくね、余君」

「私は黒気瞳よ」

「手塚国光だ。この2人は付き合っているからな」

と、手塚は瞳と河村を指差して告げる。

「ちよっと、何言ってるのよ?」

「本当の事だから、当然言わねばな」

あれこんなキャラだっけ手塚は? と、河村は心の中で泣きながら思った。

「ヨロシクね、余!」

「うん、こちらこそよろしく」

義成の身体から離れずクリスは他の人達を見渡してみると、顔の似た二人の少年に声を上げた。

「あ! ランランとロンロンがいる――!」

「やっやあ、クリス君っ」

「その呼び名はやめろと言ってるだろ」

「丹村が言っていた、同じサッカー部の先輩か」

瞳とのいがみ合いをやめた手塚が、クリスに尋ねてきた。

「うん! あ、でも同じ学年にナツタから、先輩って言わなくてイよね?」

「えっ!?!」

「……ダメ、なの……?」

涙目で願ってくるクリスに、“ランラン”こと小狼は戸惑いだす。

「誰に教わったんだ?」

「秀子か奈津あたりね」

瞳が手塚に言うのと、“ロンロン”こと小龍しゃおろんが3人に尋ねた。

「敦司とクリスの知り合いか」

「私と昌浩は同じクラス、隆と手塚は隣のクラスなのよ」

「俺は外部者だが、昔一緒にいた」

と、義成はクリスの頭を軽く叩きながら言っていた。

「聞く前に名前を言って欲しかったのだけど？」

「オレは小龍。隣にいる小狼の双子の兄だ」

「なるほど。小龍だから、“ロンロン”か……」

と手塚は、腕を組みながら深く頷いていた。

「納得しなくていいからっ」

「隣のB組にいる。横にいるのは、オレと同じクラスの知世だ」

「知世です。よろしくですわ」

微笑を浮かべる知世ともよに、「あいつと似ているな」と手塚はある少女のことを思い出した。

「その2人が、B組の4年進級生ってわけか」

といつの間にか空いている席に座っている青年、左翔太郎ひだりしょうたろうが言った。

「翔太郎君、いつの間に!？」

「上田が丹村と不二を追いかけているのを見かけてな。まあ、いつもの事だろうが」

河村に軽く説明すると、翔太郎は立ち上がって義成に近づいた。

「久しぶりだな、左探偵」

「よう、義成。元気そうだな」

そう言うと、翔太郎は義成に引っ付いているクリスを無理矢理剥がす。

「今、丈留と金田が止めに入っているぜ」

「あの2人なら大丈夫だろう」

義成は肩を落としながら、翔太郎に告げる。

「どうやら、クリスに抱きつかれて疲れてしまったようだ。」

「えっと……貴方は、誰なの？」

「俺は左翔太郎、4年B組の飛び級生。ここにいる奴らとは、腐れ縁でな。それで、お嬢さんはどなたでしょうか？」

尋ねてきた少女は進級生だと分かっていた翔太郎は、礼儀的に聞き返す。

「あっ、私、サクラっていうの。このクラスの進級生」

とサクラが言うのと、余を除く飛び級生はあー……と口をポカリと開けてしまっていた。

「中野と同じ名だなっ」

「桜蝶^{ちようひ}妃と同じ名前が、このクラスで聞くとは」

「あ、なんて呼べばいいかな？」

「区別できるようにしたら？」

「じゃあ、俺は“姫さん”と呼ぶ」

翔太郎が手を上げると、瞳も同じ動作をし。

「じゃあ、私は“サク”って呼ぶ事にするわ」

「俺は別に問題ないが、“姫”と呼ばせてもらおう」

「……俺は普通に呼ばせてもらう」

「じゃ、じゃあ、俺は“姫さん”って呼ぶからっ」

「んじゃ、“さっくん”でいいな？」

「ちよつと、もっくん。この人女だから、“さっくん”は駄目だよ！」

「サッちゃん！」

勝手に呼び名が決められ、サクラはう、うん……と戸惑ってしまった。

「一応こっちは年上だから、考えろよな」

と、サクラの隣に立っている少年が声をかけてきた。

「俺は竜堂終、4年進級生だ」
りゅうどうおわる

「竜堂？　もしかして、余の兄なのかしら？？」

怪しく笑みを浮かべ、瞳は少し見上げながら聞く。

「まあな。てか、上目で見るのはやめてくれよなっ」

「上目ではありませんが？」

クスクスッと不適な笑みを浮かばせている瞳に、これ以上は言わないでおこうと終は思った。

「それわざとでしょ、瞳ちゃんっ」

「わざとじゃないけど？」

「……えっと、そちらは5・6年の人ですか？」

恋人の笑みに弱いのは当然だからと心に言いつかせ、河村は後ろ扉の近くにいた4人に話しかける。

そんな彼をどこからか盗んできたハリセンで叩こうとする手塚に、翔太郎が“なんでやねん！”と書かれたスリッパで阻止した。

「そうだよ。オレはファイ・D・フローライト、5年生。こっちは同じ学年の、続くん」

「5年の竜堂続です。終くんと余くんの兄です」

「でもって。3人の長男で6年生の、始さん」
りゅうどうはじめ

「竜堂始だ。よろしく」

「こっちは、クラスで最年長の黒様」
くろがね

「黒鋼だ！」

怒鳴り声でクリスは耳を塞ぎ、瞳たち6人（十一匹）は聞き流した。

と、その時。

「待ちやがれ、ゴラアアアアア——ッ！！」

「誰が待つかよ！」

「いやあ、助けて——」

「死ね」

「ハアアアアアア——！！」

廊下で凄まじい追いかけてっことを繰り返している5人の声が響いてきた。

「とてつもなく楽しんでいる声がっ」

「幻聴よ」

河村の言葉を、瞳は一刀両断させる。

「なんで外道に落ちてんだよっ」

呆れる翔太郎に、さあなと義成は告げた。

〃
〃
〃

「新しい時代が来たわね」

理事長室で、理事長である壺原侑子^{いち はら ゆうこ}は窓の向こうを眺めながら、秘書の火宮トキエ^{ひみや}に語りかけた。

「そうですわね」

「去年までとは、違う期待が得られそうだわ」

「あの子の行動は、他人をも巻き込んでいき、運命を変えていきま
すから」

始業式のある体育館へと通じる廊下を、紅に染められた髪と目を
し、白衣を着た青年が歩いていた。

「今年も、いい風が吹いているな」

桜の花弁を運んでいる風を感じながら、神翼乃^{じんよくの}はフツと笑って
いた。

1話 飛び級して、4年生（後書き）

ということをやっちゃいました、リメイク第二段！

リメイク前は昌浩や義成たちが出ていないので、出演キャラが多すぎっ。

ですが、それはそれで面白い展開に運んでいこうとおもってますので！

翼乃達が教師となって、さまざまな困難に向き合っていく学園パロ！！！

『四神伝』の主要キャラに、約3名教師ではありません。
また次回から、教師役が増えていきます（ドツと）。

2話 新人教師、多し!?

『生徒の皆さんは、第一体育館の方へ集まってください。繰り返します。全学年の生徒の皆さんは、第一体育館へ集まって下さい――』

「繰り返しの時、“全学年の”って言ったよな？ 最初は言っていないのに」

「そのあたりは言わない方がいいわよ。さっきの放送、汐子の声だったわよ」

瞳が言うと、「げげっ!？」とアザだらけの敦司は絶句した。

放送により、各学年の生徒達は体育館へと移動している最中である。

「あー。たしかにな」

「せっちゃんだったネー」

「あいつ、放送室占領するって言ってたな」

「しっちゃったネー」

境太とクリスが会話をしていると、余は「あれ？」と首を傾げていた。

「汐子さんってたしか、飛び級試験に出てた」

「出ていたよ。ちゃんと」

と、境太（と修と丈留）に追われたはずなのに、なぜか無傷の不二が余に話しかけてきた。

「汐子ちゃんはA組の生徒なんだよ」

「えっ。あの優等生クラスの、ですか？」

「そうだよ。ちなみに、あそこにいる3人と手塚の上にいるクリス君もAクラスだよ」

僕と手塚とタカさんはB組だけどね、と言い、不二は更に話をした。

「君はE組にいたから分らないと思うけど。A組って、優等生というよりも超優等生なんだよ」

「超がつくほど？」

「うん。超超がつくほど」

「超が二つに増えてるんだけど、不二」

苦笑いをして、河村は突っ込みをいれた。

「確かね。A組から8人くらい、天職しちゃったんだって」

「あ。天職なら、僕の友達もだよ。一緒に試験受けたんだよ」

「へえ。そうなんだね」

「……ねえ、もっくん。不二って何者なんだろう？」

「知らん」

どうやって生還したのか分からない不二の話をする昌浩と物の怪に耳を傾けながら、義成はため息をついた。

〃
〃
〃

飛び級生組を残して、第一体育館へとやってきた進級組（約一名、留年）。

「入ってきた生徒は、クラスの書いてあるプラカードの前に並べ――！！！」

「……相変わらず声でけえよな。食堂の兄ちゃん」

「声がでかくて悪かったな、終」

「！！」

ステージ前に立っていた白銀の青年が、一瞬にして終の前に現れた。

「おはようございます。壱鬼先生」

「ああ。おはよう、小狼」

小狼に挨拶をした青年は、食堂に勤務し生徒指導の教師である、神^{じん}壱^{いつき}鬼であった。

「休みはどうでしたか？」

「食事のメニューとかで仕事だらけで、バイトもしていて休む暇はなかったな」

「そうですか」

「兄貴達是一日で全部終わらせて、あとはのんびりしていたけどよ。人に押し付けて」

「は、はあ……」

とっても大変だったんだなと、肩をまわしている壱鬼を見て小狼は思った。

「壱鬼先生。今日から新しい教師が入ってくるんですね？」

サクラが聞くと、壱鬼は顔を引きつけて言った。

「あ、ああ。多いけどな」

「？」

「壱鬼先生！」

と、壱鬼の所に淡い水色の髪をした少女が駆け寄ってきた。

「どうした、スマレ」

「理事長が、理事長が！！」

「理事長がどうしたんだ？」

「理事長が今日出ないといって代理を任されたのですが、どう言え
ばいいのでしょうか！？」

静山しずやまスマレがオドオドして言うと、4年生三人はその場にずっと
け、壱鬼は額に手を当てて呆れてしまった。

「何やってんだかつ」

「あの、どうすれば」

「心配するな。とっておきに代理人がいる」

「えっ。それって……」

「さ。行くぞ、スマレ」

壱鬼はスマレの背中を押しながら何処かへと行ってしまった。

「だっ、誰にさせるのかな？」

「一人だけいるだろう」

「……河野先生……」

「沓馬先生なら、適任だけど……でも、見たくないかも」

「ていうか。あの口調が聞きたくねえし」

そうしていると、飛び級組がやってきた。

「あ？ どうしたんすか、先輩がた？」

しゃがみこんでいる3人を見た敦司が言うと、黒鋼が眉間を寄せ
て告げた。

「理事長が代わりを出したんだとよっ」

「壺原先生、来ないんですか？」

「あの先生が来るわけない」

「ソーダね——」

手塚がクリスを降ろしていると、スピーカーからとてつもない声
が響き出す。

「早く並びやがれ！ 始業式を始めるぞっ！！」

体育担当の高岑^{たかみねゆうき}佑希が派手に叫ぶと、体育館にいる生徒は耳を塞
いだ。

「やゝ。トラ吉先生、声が大きい——」

「声がこんなにも大きいという事は、またアレですか……」

「あー。玲花ちゃんだね」

「あの人もこりませんね」

5年生の2人が話をしていると、瞳と河村も会話をしていた。

「そ、そういえば。今日から新任教師がくるんだよね」

「ええ、そうよ。あの子達がね……」

「天才にも上がっているんだね……」

「そうね……」

「ちょっとお二人さん。何和みを入れているんだ」

和み出した二人に、境太は呆れて言った。

「あー……。ただいまより、〇〇年度の前期始業式を始めます」

「司会は、泳地先生だね」

「やる気はねえけどな」

「理事長挨拶。理事長の代理として、河野沓馬先生。よろしく願いします」

社会担当の神泳地^{じんえいじ}が呆れながら言うと、他の先生によって女装させられた理科担当の河野沓馬^{かわのとうま}がステージに上がっていった。

「ドレスが似合っているわね、沓馬先生」

「アハハハッ」

沓馬は段につくと、目を細めて手紙を読み始めた。

「皆さん。進級おめでとう。でも、私には分かっていたけどね。今年からは制度が変わるけど、あなた達にならなにかできるでしょ。まあ、今年も頑張るようにね」

手紙をしまい、沓馬は魔女の笑みを浮かばせながらステージを降りていく。

「侑子先生。あとでどう料理しようかしら……」

沓馬が降りていった後。全クラスのほとんどが暴れ始めた。

「だから嫌だったんだ——!!」

「誰だよ! あの先生に頼んだのは!？」

「いや——ッ!」

「誰か倒れてるよ——!」

「助けてくれ——!!」

「いやゝ。いつ見ても面白いね、水奈君」

「そうですね、二之宮先生」

家庭科担当の神水奈じんみずなと体育担当の二之宮千一にのみやせんいちは、荒れ狂う生徒を見ながら笑っていた。

10分後に静まると。

「次に。今年から入る先生方を紹介します……と言っても、全員飛び級試験を受けて上位に入った奴らだけだな」

「飛び級上位だって!」

「どんな人だろう?」

生徒達が騒ぐ中、新任教師と思われる変わった人たちがステージに上がっていく。

「11人もいるよ!」

「背ちいせえなあ」

「可愛い」

「しぶい奴がいるな」

「白衣を着てる人、かっこいい!」

「それでは、右側にいる先生から紹介お願いします」

と言うと、一番右側にいる貧相な男の子から自己紹介をした。

おののべじろう

「小野辺治良です。数学を担当します。たまに小野妹子とも言われています。よろしくお願いします」

「シンシア・ファートとイイマス！ 英語担当デス。よろしくネ！
！」

女性服を着た男の子が紹介すると、元気いっぱい2人組と凸凹な2人組の紹介に。

きりさわしゅうこ

「桐沢秀子です。家庭科担当しちやいます」

しずきるな

「静喜杜奈だ。体育担当だけど、試合ルールとかを教えるぜ！」

「えーと……。刺禰通です。担当は……。忘れました」

さえじまれん

「俺は冴島連。担当は社会で、こいつは特別授業担当だ」

いずみやりよう

「僕は夷弗宮亮です。情報担当！ こっちは伊脩健次先生。特別授業担当だよ」

陽気な少年に言われた男は、瞬き一つして黙っていた。

はくまかいと

「……拍摩海斗。国語担当だ……」

みずのせきし

「水野汐子です。今年から図書室勤務になります。担当は国語です」
微笑みを浮かべる少女から出てくる黒いオーラを浴びつつも、少年は耐えていた。

「神翼乃。担当不明で、取締役をする」

白衣を着た眼鏡の青年——ではなく少女が言うと、周りがざわめいた。

「今。神って言った？」

「あの先生達の兄弟ってこと？」

「なんだかカッコいいね」

「綺麗な人だよな」

「誤解を招くと悪いので——俺はこう見えても女だ」

翼乃が告げると、またもざわめき出した。

「女の子なの！？」

「見えねーッ」

「妹なんだね」

「男だと思ったのに！」

「でもカッコいいー！！」

「メガネがいいね」

「何かを感じるよな」

「人気がいいですわね、翼乃」

「別にきにしてねえけどな」

ちよつとサービスをつと翼乃は微笑みを浮かばせると、賛美の聲が上がってきた。

「キャー——！！」

「カッコいい——！」

「可愛い——！」

「翼乃先生、サイコー——！」

「先生！ おれ、ファンになります——！」

「ワタシも——！」

「増えたな」

海斗に言われた翼乃が顔を引きつけていると、またも賛美の声が。

「さあ、降りるか。また騒がれるのは困るし」

「騒がせたのはお前だろっ」

連が言うと、翼乃はアハハハと苦笑しながら歩き出した。

「健次、行くよー」

「……」

「フフフツ。今年からが楽しみですわね」

「コエーって！」

汐子が放つ黒いオーラを、海斗は手で払いながら歩いていた。

〃
〃
〃

「セツチャン、ブラック！」

「いつもの事よ」

「アハハハッ」

始業式後。4年A組の生徒は、新任教師の話をしていた。

「伊脩先生。一言も言っていないね」

「あいつは、無口な方だからな」

「通のやつ。自分の担当教科を忘れるなんてよっ」

「そうだよねー。連先生がフォローしたけどー」

4年飛び級組で瞳とクリスと河村、敦司と手塚と不二がそれぞれ会話をしていた。

「まさか教師になっているとはな」

境太・昌浩・物の怪・義成・余は進学組と話をしていた。

「あの人たちって、境太君のお友達だったの？」

「貧乏男とシンシアは、別のクラスだけだな」
ビンボーメン

「けど、教師になるとはなあゝ」

物の怪が尻尾を振りながら告げると、昌浩がふとある事を思い出した。

「そういえば、1人知らないのがいたけど？」

「海斗くんは、ぼくと同じクラスだったよ」

「たしか、お前と一緒に試験受けたんだよね？」

「うん。でも、海斗くんの方が成績上なんだ」

「教師天職のやつだけだよ。飛び級試験とかで、上位をとったやつから引き抜かれるんだとよ」

上位じゃなくてよかったぜと、境太は顔を引きつけていた。

「そうなの？」

「修から聞いた話だな。最終的には理事長が決めるんだけどよ。その前に言ってくるやつが来るとか」

「やりたい奴、いるのかよっ」

「……11人の中に、一人いるんですけど。周囲を黒い物で漂わせていた」

「水野先生、だったかな」

頭を抱えている境太を見て、4人はそっと思っておこうと思った。

その頃、上級生組も新任教師の話をしていた。

「シンシア先生って、本当は男なのになんで女性服着ていたんだろ
うね？」

「知らないですよ。聞いてみたらどうですか」

「英語の担当だったからね。体育担当の静喜先生って、授業できる
のかな？」

「きっと、実技がダメなんだろうな」

「桐沢先生と夷弗宮先生、可愛かったね」

「さあな」

「そういえば。紹介の最後の人。苗字が『神』と言っていましたか」

「……あいつは、神家の末っ子だ」

3人の話を聞いていた黒鋼が、横から入ってきた。

「翼乃先生を知ってるの、黒たん？」

「その呼び名で言うなっ！ あいつは次は自分の番だと、気づいて
いやがって教師になる覚悟を決めていたんだ」

「分かっていたんだねー」

「本人は嫌がっていたが」

「やる気がなさそうでしたし」

「それよりも俺は、あいつが教師になるのが嫌なんだよっ」

「何が嫌なんだ？」

黒鋼は何か考え込みながら言う。

「あいつの性格……よりもあいつのあれが……とにかく、俺はあ
いづが嫌なんだ」

「あれって？」

「あれは、トンでもなく危険な――」
告げようとした、その時。

扉がドンと開かれ、女性の声が聞こえてきた。

「はい。席について下さ——い」

「この声は……」

「今年もあいつかよっ」

「水奈先生だ」

全員が席に着くと、水奈は入ってきて教卓の前に立つ。と、扉の向こうにいる人に声をかけた。

「何をしているのです？ おびえる事はないでしょう？？」

その言葉にビクツとし、白衣を着た紅い髪の少年が足音を立てて入ってきた。

『！！？』

「別におびえてないけど！」

「なら、どうして入ってこなかったのですか。翼乃君」

「廊下での事を、考えていたんだよ！！」

水奈に怒鳴っているのは、新任教師である翼乃だった。

2話 新人教師、多し!?(後書き)

2話でした！。

ほとんどが出てきました。

でもって、水奈が4年A組の担任っ。

2年前からやっている設定で、水奈は3年前教師になったという。

『四神伝』キャラの中で一番最初に学生から教師になったのは、泳地。

卒業して教師になったのは、佑希とトキエで。

トキエはすぐに理事長秘書についたという、裏話です。

次回までで、リメイク編集編です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6291x/>

リメイク版 天上学園へようこそ！

2011年11月23日20時52分発行